

優しい世界を望んだら

ガスキン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

- もしも、篠ノ之 箒が姉にコンプレックスを抱いていなかったら。
- もしも、セシリア・オルコットの父が誇り高い男だったら。
- もしも、風 鈴音の両親が離婚しなかったら。
- もしも、シャルロット・デュノアが義母に溺愛されていたら。
- もしも、ラウラ・ボーデヴィツヒに家族と呼べる者がいたら。
- もしも、織斑家が揃っていたら。
- もしも、天災に他人を理解する心があったら。
- もしも、亡国企業が存在していなかったら。

——もしも、そんな“IF”を望んだ男が一夏として転生したら。

これは、ISの登場人物を幸せにしたい作者が、ノリと勢いだけで書く物語。

目次

第一話 自覚 | 1

第二話 ウチの家族がちよつとおかしい

件 | 7

第三話 あなたが神か・・・ | 11

第四話 男子のツンデレって需要あるん

ですかね | 21

第五話 お前のそれは剣道じゃないKE

NDOだ | 29

第六話 天災と書いてぎんねんと呼ぶ

41

第七話 うわウチの親スペック高すぎ!?

51

第一話 自覚

——どうやら俺は転生していたらしい。

五歳の誕生日。両親、そして姉と妹に盛大に祝ってもらったその翌日。ベッドから起き上がろうとした途端に激しい頭痛と共に知らないはずの記憶が流れ込んで来た。それによると、俺は前世で酷く情けない死に方をしてしまい。それに同情した神様の一人が転生させてくれたらしい。所謂「神様転生」ってヤツだ。こんな事、所詮空想の中の出来事だと思っていたが、まさか自分が経験する事になるとは思わなかったなあ。

ちなみに、死因は正月に餅をやけ食いし、喉に詰まらせての窒息死。あの神様（パンチパーマのオバちゃん）も、こんな死に方をした俺をよく拾い上げてくれたものだ。なにせ、やけ食いの理由が、友人達を初詣に誘ったら、全員彼女や妻と行くからと断られた事による僻みだったのだから。思いつきり自業自得だ。

さて、そんなしような原因で死んだにも関わらず、転生させてもらった俺なのが、記憶を思い出した事により、自分の置かれた状況がとんでもないものだった事に気付いてしまった。

まず、俺の名前は織斑 一夏。・・・そう、前世で良くも悪くも有名だったライトノ

ベル「インフィニット・ストラトス」の主人公と同じ名前だ。どうやら、俺はその主人公として転生してしまっただけらしい。おかしい。俺はあの神様に「織斑 一夏に転生してハーレム作ってやるぜぐへへ」なんて一言も言っていない。俺が願ったのは「登場人物達が幸せになる世界」だったはずだ。

神様からどんな世界に転生したいと聞かれ、俺はISの世界と答えた。特に深い理由はない。強いて言えば、年末の大掃除で本棚の奥からISが出て来たので久しぶりに読んだ事について引つ張られてしまったからだろうか。

何年かぶりに読み返しての感想は「この作者、主人公達に恨みでもあるのか」の一言だった。特に家族関係については不憫過ぎる。失踪、離婚、確執、その他諸々。キャラの過去に重いものを背負わせるのを悪いとはいわないが、それにしたってみんながみんな同じ様にしなくなっちゃっていいんじゃないかと思ったりもした。

そこで、俺は神様に「別にハーレムとかチートとかいいんで、登場人物達がもう少し幸せになれる様にしてください」と願った。そりゃあ、ISに乗れたら・・・なんて思ったりもしたが、トラックから女の子を庇ったわけでもない死因：餅なのに転生させてもらった俺が大それた願いを口になんて出来ない。

そういうと、神様はいきなり泣き始めた。「アンタ、ええ子やなあ！ まるであの子みたいやわあ！」とか言われたが、ひよつとして俺以外にも転生させたりしているのだら

うか。…：そういうえば、転生させられる直前「アンタ自身も幸せにならないアカンで。その為に、ウチから色々プレゼントしたるからな」なんて聞こえた様な…。

そういうわけで、俺は織斑 一夏になりたいと願っていない。なのに、現実はどうして織斑 一夏になってしまっている。ならば、織斑 一夏として生きていくしかない。

気合いを入れる様に頬を叩き、俺はベッドから降りて家族達が揃っているであろうリビングに向かう途中、またしても違和感に襲われた。

織斑 一夏は物心つく前に姉と共に両親に捨てられている。記憶と共に思い出した原作知識の中ではそうなっている。

「おう、起きたか一夏」

「おはよう。もう朝ご飯出来るから先に顔を洗って来なさい」

だが、リビングに入った俺の目の前には、俺に対して笑顔で挨拶して来る両親が存在している。今の俺には過去の記憶だけでなく、生まれてから五年の間の記憶もある。その記憶の中で、両親は俺の事をとても大切に育ててくれていた。とても、子どもを捨てていなくなる様な親では無い。

「一夏、どうかしたのか？」

キッチンの方からコップを持って現れる女性。彼女こそ織斑 一夏の姉にして、後に世界最強の名を称する事となる織斑 千冬その人である。性格はまさに「凛」という

言葉が相応しく、こうして俺を見つめて来るその目も非常に蕩けて……あれ、おかしいな。鋭いつり目が特徴のはずなのに、何でそんな大好きなスイーツを前にした女子の様な目で俺を見つめてるの？

「体調でも悪いのか？ よし、私が膝枕をしてやろう」

そう言つて、千冬姉さんはソファで新聞を読んでいた父さんをどかし、自分が代わりに座つた。そして自分の膝をポンポン叩き俺を呼ぶ。途中、父さんが抗議の声をあげるが、千冬姉さんの一睨みで黙りこんでしまった。父さんエ……。

「さあ、遠慮せず来い。私の膝枕はお前だけのものなのだからな」

キラキラした目で俺を見つめて来る千冬姉さん。どうする。ここは素直に行つた方がいいのか？

「……お姉ちゃんの膝枕なんかで寝たら首を痛める」

どうしようか悩む俺の背後から突然そんな声が聞こえて来た。振り返ると、そこには千冬姉さんに良く似た少女が無表情で立っていた。

「おはよう、お兄ちゃん……。今日も朝からお兄ちゃんの顔が見れてマドカ嬉しい……」
彼女は、俺の「双子の妹」である織斑 マドカ。そう、原作では敵として登場するあの「M」が俺の妹になっていた。

「……どういう意味だ、マドカ？」

「お姉ちゃんのカチガチ筋肉のそれは膝枕とは呼ばない。お兄ちゃん、体調が悪いのならマドカのおっぱいでも吸う？」

いや、体調悪い。おっぱい吸うってどういう式ですかマドカさんや。

「はん、そんな平原で一夏が喜ぶものか。一夏、吸うなら私の方にしろ。揉んでもつついてもいいんだぞ」

「ちよつと待つて。何で俺が吸う事が決定事項みたいな感じになってんの？」

「？」

吸わないの？ と言わんばかりに首を傾げる二人。え、何で俺がおかしいみたいな感じになってるの？

「ふふ、朝から仲がいいわねあなた達」

「最近、千冬の態度が冷たすぎる件について」

「一夏」

「マドカとお姉ちゃん、どつちにするの・・・？」

この状況を仲がいいの一言で済ませる母さん。床の上で一人体育座りでブツブツ喧く父さん。そして、明らかに性格が変わっている千冬姉さんと、存在しないはずのマドカ。

そんな家族四人の姿を見て、俺はこう言わずにはいられなかった。

「・・・なあにこれえ」

第二話 ウチの家族がちよっとおかしい件

さてさて、五歳の誕生日に転生云々の記憶を取り戻し、結果ウチの家族が色々おかしい事・・・いや、この言い方はみんなに失礼だな。ええつと・・・原作との相違点が判明したわけなのだが、とりあえず、家族一人一人について、現在までの俺の見解を挙げたいこうと思う。

一家の大黒柱である父さん。仕事は普通のサラリーマンらしいのだが、何故か出張が多い。普段温厚だが、怒ると怖い。最近、千冬姉さんとマドカから冷たい態度を取られ始めいじける事が多い。原因は、自分達を差し置いて俺と遊んだりしてるかららしい。・・・あれ、父さん悪く無いじゃん。

母さんは専業主婦。少々天然の入ったおっとりさん。料理がとても上手で、記憶を取り戻す前の俺はよく手伝いをしていた。そうすれば母さんと一緒にいられるから・・・なんて子ども心に考えていた様だ。・・・言っておくが、マザコンでは無い。断じて。

正直、父さんと母さんに関しては大した問題は無い。原作では何を思っただけで失踪したかは明らかになっていないが、こうして俺を愛情込めて育ててくれている二人は間違いなく最高の両親なのだから。

・・・というか、これから挙げる二人のインパクトが凄過ぎるので二人が霞んでしま
うのは仕方が無い。本当に、どうしてこうなってしまったのか。

まず、千冬姉さん。俺のイメージする織斑 千冬は、自分に厳しく、他人に厳しい。身
内であつても容赦しない。とにかく実直、真面目、厳格。それが織斑 千冬！・・・の
はずなのだが。

『一夏、一緒に風呂に入ろう。私が背中を流してやるぞ』（胸押し付け）

『一夏、今日は私の部屋で一緒に寝よう。どうもお前と寝た方が疲れも良く取れるよう
なのでな』（だいしゆきホールド）

『一夏、父さんとだけじゃなく、私とも遊んでくれ。ほら、乳首当てゲームでもするか？』
（当然拒否）

この千冬姉さんは、俺に対しても凄く好意を向けてくれる。・・・ハッキリ言つてし
まえば、重度のブラコンだった。原作でも、少しばかりのブラコンを見せていた場面も
あつたが、あんな控えぬもんじやない。それこそ全身で「一夏大好き」を表現して来
るのだ。

たまーに。本当にたまーにだが、俺を見つめる目が捕食者のそのの様に見えたりする
が、まさか、本当に襲うつもりじやないだろう。俺、まだ五歳だし。いやまあ、大きく
なつたら良いってわけじやないけど。アレは、そう、きつと千冬姉さんなりの冗談とい

うか、お茶目というか・・・駄目だ、相応しい言葉が見つからん・・・。

うん、これ以上考えるのは止めよう。次だ次。

俺の妹であるマドカ。原作において、彼女は織斑家には存在していない。『亡国機業

』と呼ばれるテロリスト集団の一員『M』として一夏達の前に現れる『敵』である。

そんな彼女が、俺の・・・一夏の双子の妹として存在している。冷静に考えてこれほどんでもない改変ではないだろうか。もしかしたら、亡国機業すらこの世界には存在しないのかもしれない。・・・ん？ 今後の事を考えると、俺としてはむしろ望む所じゃね？

だけど、これも俺の望んだ「幸せな世界」の結果なのかもしれない。ならば、俺が口にする『原作知識』もほとんどが当てにならなくなるのかもしれない。だが、その方がいいのかもしれない。これは結末が決まっている『物語』じゃない。無限の可能性が広がる、俺の『現実』なのだから。・・・そうだ。『亡国機業』も『M』も知った事か。俺はマドカを妹として愛するだけだ。

そんな俺の大切な妹であるマドカ。大人しい性格で、喜怒哀楽をあまり表現しない子だが、彼女もまた千冬姉さんに負けず劣らずな一面を持っている。

『お兄ちゃん・・・一緒に風呂入ろう・・・。前、洗ってあげる・・・。』（そこは普通背中だよ）

『お兄ちゃん．．．怖い夢見たから一緒に寝て．．．』（俺の匂いを嗅ぎながら数秒で夢の中へ）

『お兄ちゃん知ってる．．．？ 耳たぶの延長線上は．．．乳首なんだよ．．．』（どつから拾って来た？）

そう．．．彼女もまたブラコンなのだ．．．ブラコンだよ？ まだブラコンレベルだよ？ もう強烈過ぎてどこまでがブラコンなのか境界線がわかんなくなつて来たよ．．．。あれ、そもそもブラコンってなんだっけ．．．。

これもまた「優しい世界」の結果なのだとしたら、どうやらあの神様と俺の間で「優しい」の意味は百八十度異なっているようだ。

来年、俺は小学生になる。おそらく「あの子」とその姉である「彼女」とも出会うのだろうが、果たしてこの調子で大丈夫なのだろうか。とくに「姉」の方．．．。

「二夏く。ちよつと下りて来てくれないかしら〜」

おっと、母さんからの呼び出しだ。この時間から察するに．．．夕飯の準備の手伝いだな。

「いま行くよー」

ま、未来の事を考えてみても仕方無い。きつとなるようになるさ。

そう結論づけ、俺は部屋を出て母さんの元へ向かうのだった。

第三話 あなたが神か・・・

「みなさん、入学おめでとうございます！　これから先生やクラスのお友達と一緒に、お勉強、頑張りましょうね！」

「「「「はーいー」」」」

黒板の前に立つ先生の言葉に元氣よく返事をする子ども達。そして、我が子の姿を優しい笑顔で見守る保護者の皆さん。そんなクラスメイト達とは対照的に、俺は小さくよろしくお願いますとだけ口にした。流石に精神年齢的にあんな風に振る舞うのは恥ずかしいし、かといってスルーするのは先生に失礼だと判断しての事だ。

転生を自覚して一年。あつという間に月日は流れ。本日、俺とマドカは小学校に入学した。体育館で校長先生のありがたいお言葉を頂いた後、新入生達はそれぞれの教室へ案内され、担任の先生から希望ある小学生生活について色々な説明を受けている。

ちなみに、俺とマドカは同じクラスだった。出席番号は名字が同じの場合、名前順というルールなので我が妹は俺の次。席も後ろだった。・・・さつきから後頭部に視線を感じてる。マドカさんや、今は先生が話しているんだから先生に注目しなさい。

マドカの視線を後頭部に浴びつつ、俺は横を向く。・・・いた。教室の真ん中あたり

の席に“あの子”が座っている。緊張しているのか、視線を辺りに彷徨わせ、それに合わせてポニーテールを揺れている。離れていてもわかるくらい綺麗な黒髪だった。

「あつ……」

“あの子”が俺を見る。必然的に俺と“あの子”の目線が交わる。せつかくなのでよろしくの意味も込めて微笑んでみた。

「ツ……!?!」

……ものつそい速度で目を逸らされた。うーん、この選択肢は外れだったか。でもつてマドカ、背中肉をつねるの止めて。地味に痛いから。

ついでとばかりに後ろを覗くと、入口辺りに父さん母さん、千冬姉さんが揃って立っている。今日の為に、みんなわざわざ予定を調整して来てくれたのだ。当然……とも思われるかもしれないが、原作を考えると感慨深いものがある。

あ、父さんと目があつた。ま・え・を・む・け……。あーら、怒られてしまった。つと思つたら千冬姉さんとも目があつた。き・よ・う・い・つ・し・よ・に・ね……。うん、俺は何も見なかった。

そんな家族から視線を横にずらせば、“あの子”の両親らしき二人。そして、姉である“彼女”が原作そのまんな姿でそこにいた。意外だ。妹大好きな“彼女”でも、こんな場所には来ないと思っていたが……。

そうそう、原作知識といえ、以前あまり当てにしないと決めた事が理由なのか、最近所どころ抜け落ちて来た。まあ、現状それで困る様な事は無いのであまり気にしてはいないんだけどな。

「それでは、お友達の前で、一人一人自己紹介してもらいましょう！」

おおう、やっぱり来たか自己紹介イベント。出席番号一番、相沢 剛史君がカチコチした動きで先生の隣に向かう。頑張れ相沢君。トップバッターで緊張するのはわかるが、キミが今後の流れを形作るんだから。

「あ、相沢 剛史です！ す、好きな食べ物は何ですか！ よろしくお願いします！」

「はい！ 良く出来ました！ 好きな食べ物を教えてくれてありがとう！ 先生もカレーは大好きです！」

湧き上がる拍手に、相沢君は安堵の笑みを見せる。よくやった相沢君。誰に言われたわけでもないのに、名前だけじゃなく、一言付け加えるとは。

「それじゃあ次は、井上 沙良さん」

「はい！」

二人目の井上 沙良ちゃん。三人目の植木 薫君。四人目の遠藤 愛華ちゃん。俺とマドカを入れたら、これで目出度くあ行コンプリートだ。

「では、織斑 一夏君！」

つと、そんな事考えている間に俺の番だ。さて、どうするか。あまり仰々しくしても子ども達にはわからないだろうし、かといって適当には出来ない。

「初めまして。織斑 一夏です。ここにいるみんなと楽しい思い出をたくさん作っていきたいと思っています。それと、何か困っている事があれば言ってください。俺でよければ力になります」

うーん、困つてゝの部分は正直いらんかったかな。それでも、みんな好意的に受け取ってくれているようだし、先生も「織斑君は優しいんですね」なんて言ってくれている。

父さん達の反応も悪く無い。ただ、千冬姉さんは俺が前に立った時からカメラのシャッターボタンを連打していてその顔を見れなかった。てか何あのカメラ。姉さん、あんな変形してロボットになりそうなゴツツイカメラ持ってたか？

「次、織斑 マドカさん！ いま自己紹介してくれた一夏君の双子の妹さんですね！」
「見ててね、お兄ちゃん……」

そんな言葉を残して俺の横を歩いて行ったマドカ。あの表情、よつほど自信があるようだな。

「……織斑 マドカ。好きなものはお兄ちゃん。嫌いなものは私とお兄ちゃんの仲を邪魔する全てのもの。趣味はお兄ちゃんの観察。以上……」

んー・・・こんな時でも某ネコアイドルみたいに自分を曲げない所は立派だと思うよマドカ。でもね、この凍りついた空気どうすんの？ 最初の好きなもので微笑んでいた保護者のみなさんが、嫌いなものの所で表情を変え、最後の趣味で完全にヤバイものを見る目が変わってたよ。

「あ、あははー。マドカさんはお兄ちゃんが大好きなんですわねー。先生にはお兄ちゃんもお姉ちゃんもいないから羨ましいなー」

ええ先生や・・・。必死にフォローする先生を見て、俺の中で彼女への好感度が急上昇した。

さて、マドカのおかげで微妙な雰囲気になってしまったが、それもすぐに元に戻り、クラスメイト達が次々に自己紹介をしていき、ついに「あの子」の番となった。

「ええつと・・・次は篠ノ之 箒さんですね。前に出て来てください」
「・・・はい」

先生に促され、静かに黒板前に移動する篠ノ之 箒ちゃん。彼女こそ、ISの第一ヒロインにして、織斑 一夏のファースト幼馴染である。・・・って事は、これから俺と彼女は幼馴染となるわけなんだよな。いいかげん、織斑 一夏||自分だつて認識しなければ。気を抜くと第三者視点で物事を見てしまう。こんな癖持つてなかつたはずなんだが。

「だ、だって、あんなの恥ずかしくて・・・」

「まあ、緊張しいの箒ちゃんにはハードルが高いかもしれないかな」

「わ、私は別に緊張なんて・・・!」

「してないの? じゃあ出来るよね? うん、よかったよかった! ではでは先生さん

! これから箒ちゃんの自己紹介take2が始まるからよろしく」

「え・・・え・・・?」

オロオロする先生を尻目に、女性は踵を返し後ろへ戻って行った。注意されてるけど本人はどこ吹く風くな感じだった。

「う・・・うう・・・」

? 箒ノ之ちゃんの顔が真っ赤だ。何だ、一体何をおっばじめる気なんだ?

俺が首を傾げた正にその時、箒ノ之ちゃんが動いた。左手を腰に当て、親指、人差し指、中指だけを立てた右手を顔の前に置き、可愛らしい笑顔と共に口を開いた。

「オ、オツシユ! 箒だよ! みんな、仲良くしてね! テヘッ!」

——刹那、世界から音が消えた。先生も、クラスメイトも、保護者のみなさんも、一言も発さず、箒ノ之ちゃんを凝視しているだけだった。しかし、次の瞬間、その静寂は一人の女性によって破られる事となった。

「箒ちゃんのオツス! からのテヘッ! 頂きいいいいいい!!!」

バンバンと、最早シャッター音とは思えないほどの音を出すカメラで篠ノ之ちゃんを取りまくる紫髪の女性。なんだよあのカメラ……。バズーカつて言われてもおかしくないぞ。

「しかもオツスを噛んでるし！ オツシユつて何さオツシユつて！ ああ、心がピヨンピヨンするんだよおおおおお!!!」

「・・・うう」

興奮する女性とは対照的に、篠ノ之ちゃんの表情が見る見る内に曇っていく。そして、その目に涙が滲み始め、呆気無く決壊する。

「うええええええええん！ だからやりたくなかったのにいいいいいいい！ 嫌われた！ 絶対みんなに嫌われたああああああ!!!」

「だ、大丈夫よ篠ノ之さん！ とつても可愛らしい挨拶だったわ!」

「そうだよそうだよ箒ちゃん！ 可愛い過ぎて束さん鼻血でそ——」

「いいかげんにしろ束っ!」

「なのはっ!?!」

女性の右隣にいた男性が、彼女の頭に強烈な拳骨を叩き落とした。女性はよくわからん悲鳴と共に頭を押さえながらその男性を睨んだ。

「うぐぐぐ……。何するのさマイファザー!」

「馬鹿者！ 他のみなさんの迷惑になつてゐるのがわからんのか！」

「い、いや、東さんはただ箒ちゃんの魅力をクラスメイツに・・・」

「箒まで泣かせておいて何を言う！ 来い！ お前には今一度常識という物を叩き込んでやる必要がありそうだ」

「うぷぷぷー。天才である東さんは常識になんか囚われ：え、ちよ、これつてマジコース？」

「・・・千冬君、よければ手伝つてもらえないかな」

「喜んで」

「まさかのちーちゃん参戦で東さんの寿命がマツハ！ マ、マミー！ 箒ちゃん！

へールプ！」

男性に引き摺られ、教室を出ていく女性。そんな彼女と目があつた俺は、無言で親指を立てた。

（あなたに感謝を・・・）

（へへ、お安いごようさあ・・・）

この時、確かに俺達の心は繋がつていた。後に彼女とこの時の事を語り合つた際、俺の予感はずしかったと知る事となる。

篠ノ之 東・・・やはりこの世界でも彼女はぶっ飛んでいる性格の様だ。それがいい

方向に行っているのか、それとも逆に向かっているのか、今はまだ判断がつかない。

「うえええええええん！」

そして、未だ泣きじやくり続ける篠ノ之ちゃん。だが、東さんの言う篠ノ之ちゃんの魅力をクラスの子達の理解させるといふ狙いは達成されていると俺は思う。

「「「「「」」」」」

何故なら・・・クラスのほぼ全ての男子が顔を赤らめ、女子は母性溢れる笑みを篠ノ之ちゃんに向けていたのだから。

(どうやら、みんな彼女にやられてしまったようだな)

篠ノ之ちゃん・・・恐ろしい子！

「あの子は・・・危険・・・」

マドカの眩きは俺の耳には届かなかった。

第四話 男子のツンデレって需要あるんですかね

あの衝撃？ の入学式からはや二週間。既にクラス内ではそれぞれ仲良しグループが形成されつつあった。男子だけのグループに女子だけのグループ。そして、男子と女子が混ざったグループの三種類だ。

俺とマドカはそろって混合グループの一員となっている。というか、俺から離れようとしないうちにマドカを何とか他の友達と関わらせようと俺が作ったのだ。結果、狙い通りマドカにも俺以外に言葉を交わす友達が出来た。これで、あの子の世界が少しでも広がっていつてくれるのが兄としての望みだ。

それにしても、やはり精神年齢二十歳越えに、小学生生活は中々キツイ。某名探偵漫画の初期のバーローの苦労が良くわかる。話題を合わせるだけで一苦労だ。とりあえずニチアサタイムの番組は全てチェックする様になっている。

ただ、その所為で千冬姉さんが「なるほど、一夏はこういう格好が好きなんだな」なぞと言いついて戦う変身ヒロインのコスプレ衣装を買いに行こうとした事があった。もちろん、全力で止めたが。男子だけでは無く、女子との話題づくりの為に観ていただけだったのに……。

ところで話は変わるが、「オツシユ！」でクラスの心を鷲掴みにした篠ノ之ちゃんもまた別の女子グループの一員となっていた。入学式翌日からはもう武士キャラに戻っていたから、面食らった子達も多かったが、それでも好意的に受け入れられていた。「箒ちゃんってプリズムブルーみたいだね!」

プリズムブルーというのは今放送中の女子向けアニメ「魔法戦士プリズム5」に登場する葛城 藍璃というキャラが変身した姿の名前である。プリズム5一番の実力者で、ポニーテールに武士口調と、篠ノ之ちゃんと似た部分が多い。当の本人は「何だそれは？」と首を傾げていたが、おそらくプリズム5を観ていないんだろうな。

とにかく、女子に大人気の篠ノ之ちゃん。しかしその反面、男子はあまり積極的に彼女に話しかけに行こうとしない。たぶん、照れとか恥ずかしさが邪魔して近付けないんだろうな・・・と微笑ましくなった。え、俺？　そういうの皆無なので普通に話しかけてますけど。と言っても、まだそこまで親しくないから二、三回くらいしか会話してないんですけどね。

そんな日々の中、ついに篠ノ之ちゃんに対し行動を起こした男子達がいた。ただし、そのやり方は褒められたものでは無かったのだが。

「やーい、男女」

「男女——!」

この日、教室に入った俺とマドカが見たのは、篠ノ之ちゃんを取り囲み、口々に「男女」と囁し立てている四人の男子の姿だった。あれ、このイベント原作より早くない？ 確か二年生の頃に起こるんじゃないやなかったっけ。

「おりゃー！」

一人の男子が篠ノ之ちゃんの髪を纏めていたりポンを引つ張る。解けたリボンが男子の手に渡り、篠ノ之ちゃんの長髪がバサッと広がった。

「か、返せ！ それは姉さんがくれた大切なリボンなんだ！」

「へん、男女の癖にリボンなんか着けてんじゃないやねえよ」

手を伸ばす篠ノ之ちゃんを別の男子が突き飛ばす。・・・さて、そろそろ動かないとマズそうだ。

「お兄ちゃん・・・行くの？」

「ああ。これ以上は篠ノ之ちゃんにも・・・彼らにも良くないしね」

子どもらしく力に訴えてしまえば簡単にあの四人を止められるだろう。だが、見た目はともかく、中身は子どもでは無い俺には彼らを傷付ける選択肢ははなから存在しない。力では無く、別の手段で彼らを止めるべきなのだ。

「キミ達、そのくらいにしておいた方がいいぞ」

オロオロしているクラスメイト達の間を抜け、俺は四人と篠ノ之ちゃんの前に立つ

た。

「なんだよ織斑、お前この男女の味方すんのかよ！」

「いいから、早く篠ノ之ちゃんにリボンを返して謝るんだ」

「やっぱり、お前そいつの事好きなんだろ！」

やっぱりって何だやっぱりって。俺、キミ達の前で篠ノ之ちゃんの事が好きだって言った事あったか？ 子どもらしい滅茶苦茶理論だが、そういう事ならその理論を利用してもらおう。

「ああ」

「「「え？」」」

「なん・・・だと・・・」

頷く俺にポカンとする四人。同時に後ろからマドカの声でオサレ死神漫画のセリフが聞こえて来た。どうしたマドカ。誰かの霊圧でも消えたのか？

冗談はさておき、今ので場の流れをこちらに引き寄せる事が出来た。ここから一気に彼らを巻き込んでやる。

「俺だけじゃない。キミ達も含め、きつとこのクラスのほとんどの男子が篠ノ之ちゃんの事が気になってるんじゃないのか」

「は、はあ！俺がこの男女の事を好きनावけないだろ！」

「そ、そうだ！ 誰がこんな男女の事・・・！」

「誤魔化さなくていい。篠ノ之ちゃんくらい可愛い女の子に対して何も感じなかったら、それはそれで男として終わってる。キミ達の感情は至って正常だよ」

「か、可愛っ・・・!?!」

篠ノ之ちゃんが何か言いかけて口を噤んだ。いきなりしやしやり出て来られて迷惑かもしれないがもう少し我慢してね。

「だから、篠ノ之ちゃんにちよっかいをかけたくなるキミ達の気持ちもわかる。・・・けど、これは少しやり過ぎじゃないかな。いきなり悪口を言われたり、お姉さんからもらった大切な物を取られたり、突き飛ばされたりして、篠ノ之ちゃんが傷つかないと思うかい？」

「それは・・・」

ぼつが悪そうな表情で互いを見合う四人。ここまでくればもう一押しかな。

「キミ達が本当に篠ノ之ちゃんと仲良くなりたいのなら・・・これからどうするべきかわかるよね？」

論す様にそう言うと、四人は頷き合い、篠ノ之ちゃんへ近づいた。

「・・・ごめん、篠ノ之」

「俺達、ちよつとふざけ過ぎた」

「織斑の言う通り、篠ノ之の気持ちを考えて無かった」

「リボンも返す。だから・・・」

「許してください！」

リボンを差し出ししながら、深々と頭を下げる男子達。対する篠ノ之ちゃんは何故か縋る様な目線を俺に向けて来た。どうしたらいいのかわからないって顔だ。

「どうかな篠ノ之ちゃん。彼らも反省しているみたいだし。許してあげてくれないかな？」

しばしの沈黙の後、篠ノ之ちゃんはリボンを受け取りながら小さな声で答えた。

「・・・許す」

「え？」

「だから、許すと言ったんだ」

篠ノ之ちゃんの許す発言で四人の顔が安堵に染まる。

「ただし、二度目は無いぞ！ それと、他の女子達に同じ事したら許さないからな！」

「は、はい！」

よしよし、これで、一件落着かな？ 俺は手を叩いてクラスのみんなに声をかけた。

「それじゃ、この話はこれでお終いだ。そろそろ先生が来る頃だろうし、みんな授業の準備をしよう」

俺がそう言うのと、みんな元気な声で「はい！」と返事をしながら授業の準備を始めた。．．．なんか、俺が先生みたいなボジになつてゐる気がするけど．．．まあいいか。

「お兄ちゃん．．．カツコ良かった．．．。けど．．．あの言葉に私はおこだよ．．．」
恨めし気な顔でピシピシと脇腹を突いて来るマドカ。だから、その地味に痛い攻撃は止めれ。

「お、織斑」

マドカの突きから逃げようとした俺に篠ノ之ちゃんが声をかけて来た。

「その．．．助けてくれてありがとう」

「どういたしまして。と言つても、俺はただ偉そうにくっちゃべつただけなんだけどね」
「そんな事は無い。父さんが言つていた。「真に実力を持つ者の中には、戦わずして相手を屈服させる者がいる」と。私はそんなヤツいるはずが無いと思つていた。けど、さっきのお前を見て、私はお前がそうなんだと思つた」

「いやいやいや。それは流石に大袈裟過ぎるって」

「お兄ちゃんなら当然」

「妹の信頼が重すぎる件について．．．」

「ふふ、お前達は面白いな」

そう笑いながら、篠ノ之ちゃんが髪を整える。慣れた手つきで髪を纏め、数秒もしな

い内にポニーテールが復活していた。

「やはり、この髪型でないと落ち着かないな」

「・・・」

「ん？ どうした織斑？」

「やっぱり、篠ノ之ちゃんにはポニーテールが良く似合ってるな」

「なっ・・・!?」

「はーい！ みんな席についてくださーい！」

「先生が来た。マドカ、篠ノ之ちゃん、席に戻ろう」

俺は急いで自分の席に戻った。号令が終わった所で、マドカが小声で話しかけて来た。

「お兄ちゃん、マドカも髪伸ばすから」

え、あ、うん。別に俺に許可なんか求めなくてもマドカの好きにすればいいよ。

こうして、俺と篠ノ之ちゃんは少しだけ仲良くなれたのだが、話はこれで終わらなかった。

「二三兄貴、一緒に遊ぼうぜー！二三」

何故か、あの四人の男子に懐かれてしまったのだ。しかも兄貴って何さ・・・。

「ぐぬぬ・・・お兄ちゃんはマドカのお兄ちゃんなのに・・・」

第五話 お前のそれは剣道じゃないKENDOだ

篠ノ之ちゃんのリボン事件から数日が経過した。この日、朝のHR前の時間、俺は四人のクラスメイトと談笑していた。この四人というのでピンと来たかもしれないが、彼等はリボン事件で篠ノ之ちゃんと和解した子達だ。

「兄貴、昨日のテレビ見たか?! すっげー面白かったよなー!」

俺に向かって身を乗り出しながら元氣よく声をあげるのは、彼等のリーダー各であるゴリ君だ。このゴリというのはもちろん本名では無く渾名なのだが、本名で呼ぼうとすると「俺と兄貴の仲じゃねえか。名前で呼んでくれよ!」と頑なに拒否されたので、仕方なく俺もゴリ君と呼ばせてもらっている。

「ゴリ君。同意を求める前にまず番組名を言わなければ兄貴もわかりませんよ。もしかしたら違う番組をご覧になっていたのかもしれないし」

そんなゴリ君に冷静にツッコミを入れている眼鏡の少年。仲間内からハカセと呼ばれている彼は、どこに行くにも常に分厚い辞書を持ち、仲間達からの質問に瞬時に答えるとても頭のいい男の子だ。重く無い? と聞けば「僕はアナログ派なので」と返された。今どき珍しい子だなと思う。

「あははー。ゴリは馬鹿だなー」

ニツコリ笑顔でストレートな言葉をゴリ君に向けたのはハル君だ。いつも太陽みたいにニコニコしているからそう呼ばれる様になつたらしい。小柄な少年で、整つた顔立ちも合わせて王子様みたいな子なのだが、毒舌というか、中々にキツイ言葉をポンポン口にするので、初見で驚かれる事が多いのだとか。

「んだとハル！ もう一回言つてみる！」

「この距離で聞き返すとか、ゴリ、耳掃除ちゃんとやつてるの？」

「ああ!？」

「お、落ち着けてゴリ！」

最後の一人であるヤス君がヒートアップするゴリ君を止めに入つたのだが・・・。

「ヤスは引つ込んでろ！」

「そうそう、ヤスの出番は無いよ」

「ヤス君、空気を読んでください」

「何で止めようとした俺が責められてんの!？」

今のやり取りでわかるように、彼はこのグループの中の所謂イジラレ役だった。イジラレ役というのは一歩間違えたらイジメに発展する恐れもあるが、今の所その心配は必要なさそうだった。ちなみにヤスというあだ名も特に意味の無いものらしい。

「兄貴く。ゴリ達が俺を虐めるく」

「大丈夫だよ。ゴリ君達も本気で言っているわけじゃないさ」

俺がそう言うと、ヤス君は「俺の味方は兄貴だけだぜ」と哀愁の籠った表情を見せた。とまあ、中々に個性的な子達だが、基本的にみんないい子だ。兄貴兄貴と慕われるのは少々くすぐったい気もするが、仲良くしていけたらと思う。

んでもって放課後。鞆を持って席を立った所でゴリ君達が駆け寄って来た。

「兄貴、もしヒマならこれから公園に集まって遊ぼうぜ！」

「これから？」

「・・・ダメ。お兄ちゃんはマドカ達と一緒に行く所がある」

とそこへ、篠ノ之ちゃんを連れてマドカがやって来た。・・・ああ、そういえば今日の朝、千冬姉さんから放課後は空けておいてくれて言われてたな。

「すまないゴリ君。マドカの言う通り、今日は予定があるんだ」

「そっかあ。・・・なら、また今度遊ぼうぜ！」

「ああ。ぜひまた誘ってくれ」

「じゃあな兄貴！」

「さようなら篠ノ之さん」

「織斑さんも気をつけて帰りなよ」

「え、ちよ、俺も何か・・・サ、サラダバー!」

ゴリ君、ハカセ君、ハル君、そしてヤス君の順番で挨拶をして去っていく四人。その背中を見送った所で俺達は顔を見合わせた。

「お兄ちゃん、サラダバーって何?」

「・・・触れてあげるなマドカ」

「? わかった」

「ところで、これから俺達はどこに行くんだ」

ヤス君の為に話をさっさと切り上げ、俺は思っていた疑問を口にした。

「ああ、お前達にはこれから私の家に来てもらう」

「篠ノ之ちゃんの家? ひよつとして・・・篠ノ之神社かい?」

「ちやつ・・・! お、織斑。前から言おうと思っていたのだが、そのちゃん付けは止めて欲しい。なんだか軟弱な響きだし・・・何より、私みたいな可愛げの無いヤツに付けても違和感しかないだろう」

「いや、その理由ならむしろ付けるべきでしょ。篠ノ之ちゃん可愛いんだから」

「なあっ————!」

「ただけ自己評価低いんだこの子は。自分がどれだけ魅力的なのか、このクラスが証明しているというのに。」

「ちよ、ちよにかく！ 千冬さんも待つてるし、早く行くじよ！」

カミカミなセリフと共に教室を飛び出して行く篠ノ之ちゃん。おーい、案内役が先に行ってどーすんの。

「マドカ、置いてかれる前に俺達も急ごう」

「お兄ちゃん、マドカはちゃん付けしていいよ」

「いや、妹にちゃん付けはおかしいだろ。ほら、行こう」

「・・・解せぬ」

そういうわけで、やって来ました篠ノ之神社。いやあ、石階段は強敵でしたね。これを毎日上り下りしている篠ノ之ちゃんは凄いわ。

「・・・ところで、何でお姉ちゃんが神社に？」

マドカがコテンと首を傾げる。うむ、とても可愛らしいしぐさだ。十点あげよう。

「すまない、説明が足りていなかったな。この篠ノ之神社の境内には道場があるんだ。千冬さんもそこにいる」

「道場？ 何の？」

マドカの質問に、篠ノ之ちゃんは篠ノ之の家の歴史も交えながら説明をしてくれた。淀みなく言葉を紡ぐその姿は、自分の家に誇りを持つている様に俺に見えた。

「そういうわけで、千冬さんもここで剣の修業を行っているというわけだ」

「なるほど、あのガチガチ筋肉の秘密はこれだったんだ・・・」

「それ、本人の前で言わない様にな」

軽く嗜めつつ、篠ノ之ちゃんの後に続いて道場へ向かう。入口の扉を開けた瞬間、中から気合いの込められた叫び声がいくつも聞こえて来た。

「ほわぁ・・・」

何とも気の抜けた声を出しながら目をパチクリさせるマドカ。それを見て篠ノ之ちゃんが微笑む。

「ふふ、これくらいで驚いていたら身が持たないぞ。・・・さて、父さんと千冬さんは・・・」

「おお、帰って来たか箒」

どうやら向こうから見つけてくれた様だ。一人の男性が俺達の前にゆつくりと歩いて来た。この顔には見憶えがある。間違い無い、入学式の日千冬姉さんと一緒に「あの人」をお仕置きした篠ノ之ちゃんのお父さんだ。・・・にしても、明らかに他の人達と雰囲気が違う。武士じゃん。その右手に持つてるの竹刀ですよ？ 真剣じゃないですよ？

「ただいま父さん」

「ああ、お帰り。後ろにいる二人はもしかして・・・」

「ツ・・・!」

視線を向けられ、マドカが咄嗟に俺の背中に隠れた。流石のマドカも怖かった様だ。

「ははは、怖がらせてしまったかな。私は篠ノ之柳韻。箒の父でこの神社と道場の主だ。キミ達は千冬君の弟さんと妹さんだね?」

「初めまして、織斑一夏です。こっちは妹のマドカです」

「・・・には」

「一夏君にマドカ君だね。学校では箒が世話になっている様だ。父として、お礼を言わせてもらうよ」

「世話・・・ですか?」

「特に一夏君、箒からはキミの事をよく聞いているよ。「父さん、織斑は凄い「めえええええええん!!」とか、「私の目指す強さの形・・・それはアイツ「どおとおおとおお!!」なんて具合にね。この娘がこれほどまでに言う子だ。私も一度会いたいと思って・・・」

「わーーーーー!! わーーーーー!!」

「どうした箒、いきなりそんな大声を出して?」

怪訝な表情を見せる柳韻さんを無視し、篠ノ之ちゃんは睨むように俺を見つめて来た。

「お、織斑！ 今のはだな・・・！」

「ゴメン篠ノ之ちゃん。周りの声が大きくて上手く聞こえなかったんだけど」

「え、な、そ、そうか！ それならいいんだ！ うん！」

顔を真っ赤にしながらしきりによかったと繰り返す篠ノ之ちゃん。ぐぬぬ、そんな反応されると逆に気になるのだが・・・。

「それで、千冬姉さんは・・・」

「ああ、千冬君ならあそこだよ」

「はあああああああ!!!」

柳韻さんが指し示した方へ顔を向けたその瞬間、剣道防具に身を包んだ千冬姉さんらしき人物が目にも止まらぬ速さで対戦相手に剣を振り下ろした。周囲にバシイイイインという凄まじい音が鳴り響く。

「・・・流石千冬君だ。この調子で成長すれば、数年後にはとんでもない怪物になりそうだな」

つまり、千冬姉さんはこの時点ですでに人外への道を歩み始めているというわけですね。はは、何それワロス・・・ワロス・・・。

対戦相手に一礼し、千冬姉さんが面を取る。その瞳が俺達を捉え、姉さんは嬉々とした表情で俺達の方へ近寄って来た。

「来ていたんだな一夏、マドカ」

「ついさつきね。今の見てたけど、凄かったよ姉さん」

「ふっ。惚れ直したか」

「うん」

剣道なんか前世の選択授業でしかやった事無いが、そんな俺でもさっきの一撃は美しいと思ったし、純粹に見惚れた。

なんて思っていたら、何故か目の前で千冬姉さんがorz・状態になっていた。

「何故だ・・・何故いま私はレコーダーを持っていなかったのだ・・・！」

「いや、持ってたらダメだろ」

「甘いねお姉ちゃん・・・。私なんか常に三つ携帯してるもん・・・」

「何故に？」

「お、おほん！　ところで今日来てもらったのはだな」

俺のツツコミは見事にスルーされた。

「一夏、マドカ。お前達さえよかったら、ここで剣道を始めてみないか？」

「剣道を？」

「先生」

「うむ、そこから先は私が話そう」

姉さんからバトンタッチされ、柳韻さんが説明を始めた。簡単に言うくと、最近引つ越しやら何やらで門下生がごっそり減ってしまったので、今いる門下生達に始めてくれる子がいないか色々聞いていたらしい。そこで、千冬姉さんが俺達の話をしたもんだから、それならぜひ・・・との事だそうだ。

「でも、色々お高いんでしよう?」

「道着や防具はこちらで用意するよ。お願いする身である以上それくらいはさせてもらうよ」

いや、今のはちよつとボケてみただけというか、そんな冷静に返されるとこつちが恥ずかしいです。

なんて言うか必死に考えていると、篠ノ之ちゃんがおずおずと言った感じで声をかけて来た。

「織斑、もちろんお前が嫌なら断つてくれてもいい。それでも、出来れば私はお前に剣道を始めて欲しい」

「え?」

「剣道を始めた時、父さんは私に言った。私にとっての『強さ』とは何なのか、いつかそ

の答えを聞かせて欲しいと。・・・今の私にはその答えがわからない。だけど、お前と
なら掴む事が出来るかもしれない。私なりの「強さ」・・・その答えを知る切っ掛けを。
お前と共に、互いを高め合える様になれたら・・・私は、嬉しいんだ」

胸に手を当て、はにかむ篠ノ之ちゃん。・・・うん、もし今この状況を見ている人が
いたら、きつと俺と同じ事を思っているはず。それじゃあみなさん、声を揃えて、せー
の・・・!

(ここの子の中で俺の評価どうなってるのとおおおおおのおおおおおお?)

「す、すまない。こんな事いきなり言われてもお前だつて困るだわうに・・・。でも、こ
れが私の正直な気持ちなんだ」

止めて! そんなキラキラした目で見ないで! 俺には眩し過ぎて直視できな・・・。
「ふっふっふ・・・話は聞かせてもらったよ!」

その時、どこからか突如として女性の声が聞こえて来た。上か!? 下か!? いや・・・
後ろか!

「はろはろー! 東さん一人お届けに参りましたー! この私を差し置いて何やら楽し
そうな事をしている様だけど、そうは問屋が卸さないよ! 四の五の言わずに混ぜやが
れい!」

青いワンピースの上からエプロンを纏い、背中に大きなボン。極め付きはその頭に

ついているウサギの耳。おおよそ道場に似つかわしくない意で立ちをした女性がポーズを決めて立っていた。

「うぶぶぶ。みんな東さんの華麗な登場に見惚れちゃった・・・」

「・・・東。とりあえず入口を閉めたらこちらに来て正座しなさい」

「待つてよマイファザー。まだセリフの途ちゅ・・・」

「正座」

「・・・はい」

(どーすんだよこの空気・・・)

正座させられ、柳韻さんに説教をされる女性を見つめなら、俺は周囲を漂う微妙な空気に溜息を吐くのだった。

第六話 天災と書いてざんねんと呼ぶ

「東、お前は自重という言葉を知っているか？」

「はい……」

「私はな、別にお前に淑女になって欲しいわけではない。むしろ、お前のその奔放な性格は好ましいと思っっている」

「はい……」

「しかし、お前ももう中学生だ。常日頃とは言わないが、時や場の状況に合わせて落ち着きを持つ事も大事だと私は思うのだが」

「はい……」

女性の乱入からの正座、そして説教という展開から既に十分近くが過ぎていた。最初こそ柳韻さんの言葉に果敢にも口答えしていた女性だったが、五分くらい経った頃から勢いが弱くなり始めて、今では「はい……」しか言わなくなっていた。心なしか、頭につけているウサ耳が垂れている様にも見える。まさか、装着者の気持ちに合わせて変化してるのか？ この人ならそれくらい物なら普通に作りそうだし。

「篠ノ之ちゃん、止めなくていいの？」

後ろで門下生達が一生懸命剣を打ち合っている中で、の正座説教タイムというシユールな光景を打破するべく、俺は隣にいる篠ノ之ちゃんに耳打ちしてみた。

「気にするな。こここの人間からしたら馴染みの光景だからな。その証拠に誰も気に留めてないだろう?」

言われてみれば、十分間の説教なんて中々な長さのはずなのに、みんな剣を止めるどころかこつちを見向きさえしてないぞ。つまり、篠ノ之ちゃんの言う通り、これがここでは当たり前つて事なのか。・・・何だろう、この女性から一気に残念臭が漂い始めて来たんですけど・・・。

「とは言え、今日は織斑達が来てくれているし、これ以上残姉さん相手に時間を潰すのもよくないな。仕方無い、止めるとするか」

「ちよ、呼び方辛辣過ぎい! そして仕方無くなのね。お姉さん、体が震え始めてますけど。」

「父さん、そろそろ・・・」

「箒?・・・おお、しまった。私とした事が一夏君達の前にも関わらずつい。すまないな二人とも。待たせてしまった」

「いえ。ところで、そちらは? 確か入学式の時にもいらっしやいましたよね?」

「ああ、よく覚えていたね」

「・・・強烈だったから」

ポツリとマドカが呟く。まあ、あの自己紹介のやり直し要求からのオツシユは忘れてくても忘れられないよなあ。・・・横で篠ノ之ちゃんが何か耐える様にプルプルしているのには触れないであげておこう。

「私のもう一人の娘で箒の姉だ。東、挨拶しなさい」

「・・・ふっふっふ。ようやく、ようやくこの時がやって来た！ パピーの説教を耐え、ついに東さんのターンがやって来たのだあ！」

（あ、全然反省してないなこの人・・・）

「さあ、耳をかつぽじつてよく聞かがいい！ 我こそは、そこにいるプリティーでキュートな箒ちゃんの姉にして、世紀の大天才と呼ばれる（予定）パーフェクトウーマン！ その名は篠・・・！」

テンションが極まったのか、正座から一気に立ち上がろうとした女性だったが、その表情が瞬く間に真顔に変わり、言葉が途切れた。

「東？」

「姉さん？」

柳韻さんと篠ノ之ちゃんが訝し気に声をかけた次の瞬間、女性の両目から涙が流れだした。そして、涙声で女性は一言。

「・・・足が痺れて立てない」

そう俺達に訴えて来た。いたたまれなくなった俺は、とりあえず足を軽く伸ばしてマツサージするといいですよ・・・とアドバイスするのだった。

「篠ノ之東です。箒ちゃんの姉です。よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げる女性・・・篠ノ之東さん。さっきまでのテンションとは対照的に落ち着いた挨拶だった。理由は恐らく・・・彼女の後ろに立っている三人（柳韻さん、篠ノ之ちゃん、姉さん（竹刀装備））だろう。

「初めまして、織斑一夏です」

「・・・織斑マドカです」

「んっふっふ。なるなるなるほどお。キミ達がちーちゃんご自慢の弟君と妹ちゃんか」

興味深々といった様子で俺達を見渡す東さん。彼女が俺の知る「篠ノ之東」ならば、ここで興味を持たれるのと持たれないのでは今後の対応がかなり違って来るはずだ。

（ひとまず、第一関門は突破か？）

「ちーちゃんつてば酷いんだよ。学校じゃいつもキミ達の自慢ばかりする癖に、写真の一枚も見せてくれないんだもん。仕方無いから勝手に妄s・・・イメージとかしてた

んだけど、思ったより差異が無くて東さんビックリだよ」

「何を言う。お前こそ妹の話か宇宙の話しかしないじゃないか。おかげで学校では陰でシスコン呼ばわりされてるんだぞお前は」

「それはブーメランドよちーちゃん。ちーちゃんだって、ブラコン（＋シスコン）の織斑〃って通称されてるじゃん」

「？ そののどこに問題がある」

いや、そんな「お前は何を言っているんだ？」みたいな顔されても……。

「どうした織斑？ 両手で頭を抱えて」

「学校での姉の知りたくなかった部分を知ってしまった……」

「ああ……」

「篠ノ之ちゃんはその……平気なのかい？ お姉さんがそう呼ばれてて」

「表現の仕方は間違っているとは思いますが、それでも姉さんなりに私の事をとても愛してくれていると感じているからな。だから、困惑する事はあっても嫌悪する事は無い……かな」

そう言うつてはにかむ篠ノ之ちゃん。ああ……天使や。ここに天使がおるで。

そうだな、確かに篠ノ之ちゃんの言う通り。姉さんのそれはちよつとばかり過激だけど、姉さんなりの愛情表現なんだ。それだけ俺の事を想ってくれているって事なんだ

よ。うん、そう考えるといい事じゃ……。

「まあ……布団に潜り込んで来たら容赦無くしばき倒すがな」

「何があつたのさ!?!」

「二度添い寝して欲しいと言われて領いたら、不自然なくらい体をまさぐられたからな。それ以来枕元に竹刀は欠かせんのだ」

「何やつてんの!?!」

「全くだ。妹の体なんか触って何が楽しいのか。あの時はくすぐったくて寝るどころでは無かつたぞ」

まあ、まだ小学生だもんね……。

「何だ織斑、そんな微笑ましいものを見る様な目で私を見つめて」

「篠ノ之ちゃんはそのままでいてくれな」

「?」

「お兄ちゃん、私ならイケるよ?」

「そつかー。マドカはもう手遅れかー」

どっから知識を得てるのか調べないとなー。

「うむ、いい感じに打ち解けて来た所で本題に戻ろうか」

この状況でそう言える柳韻さん流石です。

「とりあえず、今日は見学してもらおうつもりだが」

「マイファザーよお、見学だけじゃつまらないでしょ。竹刀握らせただげたらあ？ 実際
に振ってみたら興味湧いたりするんじゃないの？」

「む……一理あるな。しかし防具がまだ……」

「必要無いじゃん。打ち合うわけじゃないんだしき」

「……わかった。では二人とも、ついて来なさい」

そう言われて柳韻さんの後に続いて道場の奥の方に移動すると、そこには様々な形の竹刀が保管されていた。

「ここには普及型と呼ばれる一般的な形の竹刀はもちろん、我が流派の剣技に合わせて特別に作ってもらった竹刀もある。今マドカ君の前に立てかけてあるのは通常の半分くらいの長さしかない小太刀形の竹刀だ」

「ふうん……」

説明を受けたマドカがその小さな竹刀を手取る。その場で二、三回振ってみたが、お気に召さないのか首を傾げる。

「振りやすい。けど、なんか物足りない」

「ゲームとかだとそのサイズの刀で二刀流とかやったりするよな」

「二刀流……」

ただの思いつきを口にしたただけだったのだが、マドカはその響きが良かったのか同じ竹刀をもう一本手に取った。そしてそれを振るったのだが、その動きは素人の動きのほずなのに、俺の目にはどこか鮮麗に映った。

「ほお・・・」

柳韻さんが感嘆の溜息を漏らす。東さんもまた顎に手をやりながら楽しそうな表情をマドカに向けている。

「ふむふむ・・・そこに目をつけるとは流石ちーちゃんの妹ちゃんとも言うべきかな」
ま、まさか・・・妹も姉と同じ人外の道を・・・!? 止めて! 人外と人外に挟まれ
たら凡人の僕は耐えられません!

「そういえば、お前も同じだったな。・・・マドカ、本当にそれでいいんだな?」

「うん。お兄ちゃんが選んでくれたから」

え、いやちよつと。俺は別にそういうつもりで言ったんじゃない・・・!

「ありがとう、お兄ちゃん」

「アツハイ」

・・・キラキラお目々からの上目使いコンボには勝てなかったよ。

「さて、次は一夏君の番だな。どの竹刀にするか決まったかい?」

「俺は普通のでいいです」

「それならこの辺りの物だな。持ってみなさい」

手渡された竹刀を両手で持つ。重くは無いかと聞かれたので丁度いいと答えておいた。

「では好きに構えて振ってみなさい」

好きにと言われてもな。ええつと・・・とりあえず向こうで練習している人達でも参考にして・・・。

「織斑、竹刀はこう握るんだ」

俺が困っている事を察したのか、篠ノ之ちゃんやんが横に並んで実演しながら教えてくれた。おかげで格好だけはマシになった。こっから竹刀を上段に構えて・・・振り下ろす！

「うむ、思い切りのいい振り下ろしだった」

柳韻さんからお褒めの言葉を頂いた。まあ、反応を見るにマドカほどではなかったみたいだが。

「どうだ二人とも、初めて剣を持った感想は」

「・・・悪くない」

「そうか。一夏は？」

「とりあえず、マドカはやっぱり姉さんの妹だな・・・と」

この日、俺は人外シスターズ誕生の立会人となった。

それから一週間後、俺達は揃って道場に通う事になるのだった。

第七話 うわウチの親スベック高すぎ!?

金曜日の夕方、明日からの連休をどう過ごそうかマドカと話しながら下校すると、珍しく千冬姉さんが先に帰っていた。

「ただいま姉さん」

「ただいま。……お母さんは？」

「ああ、お帰り。……マドカ、今日の朝食時に父さん達が言っていた事を忘れたのか？」
「目玉焼きをハムハムしてるお兄ちゃんを見るのに忙しくて何も聞いてなかったけど何か？」

姉さんが大きく溜息を吐く。いや、そんな当然ですけどみたいな表情されたそうなるわ。

「全くお前というヤツは……。もう少し周囲に気を配れと言っているだろう。そうすれば私の様に一夏のハムハムを眺めつつちゃんと話を聞き取る事だって出来るのに」

「そっちはいい！ じゃなくて、俺のハムハムとかどうでもいいから！ あれだろ！ 今日父さんの会社が新しく海外の企業と業務提携を結ぶ事が決まったから……」

「うむ、向こうの社長がわざわざ来てくれたから隣のホテルで開かれるパーティーに

二人で一緒に出席する事になった。なので今日は父さん達の帰りは遅くなるから三人での夕食となる」

「ぎよーむてーけー?」

「あなたの会社と私の会社で一緒にお仕事しましょうって意味でいいと思うよ」

「そうだな。あまり専門的な事はまだお前達には難しいだろうから今はそう受け取っていれればいいさ」

「ふうん。……あれ、ちよつと待って」

衝撃的な事に気づいたとばかりに目を見開くマドカ。何だ? もしかして夜遅くまで父さん達に会えないから寂しくなつ——。

「という事は、お父さん達が帰ってくるまでお兄ちゃんといちやラブし放題……!?!」

ふおおおおおと鼻息を荒くしだす妹を至近距離で見ることになった兄である僕の気持ちを誰かわかってくれますか?

「はあ……。何を言っているんだお前は」

ね、姉さん! そうだよな。こういう時こそ長姉としてビシツと妹に言っつけてくれ。!

「一夏と市ヤツキヤウフフするのは私だ」

フアツ

!?!?!?!?

……

……

……

「ただいま」

夜の十時を回ろうとした頃、玄関からやけに上機嫌な父さんの声が聞こえてきた。なお、現在俺はマドカに膝枕をさせられ（本人は幸せそうに寝ている）、千冬姉さんには肩によりかかれながら匂いを嗅がれている。もう一度言うが匂いを嗅がれている。

「おろ、一夏まだ起きてたのかあ？ 駄目だぞ、子どもはもう寝てなきや」

「いいだろ。明日休みなんだし」

「ただいま千冬。マドカは……寝ちやったみたいね」

「お帰り母さん。……二人が帰ってくるまで起きていたが、一夏に膝枕されてすぐに寝てしまったよ」

「ふふ、昔からお兄ちゃんの膝枕が大好きだものねえ。ひとまずお部屋につれていきましようか」

「起こさないように気をつけつつ、姉さんがマドカを部屋へ運んでいった。数分経って戻ってきた姉さんを入れた四人でそれぞれ腰を下ろす。

「それで、パーティーはどうだったの？」

「楽しかったぞ！ 久しぶりに友達にも会えたしな！」

「それって相手の会社に友達がいたって事？」

「そうだぞ。いやあ、アーノルドのヤツ学生の頃よりまたデカくなってて驚いたぞ」

ほー、父さんに外国の友達がいたなんて。アーノルドさんか。……なんか筋肉過ごそうないメージが勝手にわいて来るよう名前だわ。

「まさか、アイツが社長になるとはなあ。まあ、留学してた時からこいつは偉くなるぞとは思ってたけど」

「社長!? え、じゃ、じゃあ、父さん社長さんと友達!? いやいやいや、どこで出会ったのさ!?!」

「ん? ああ、父さん学生の頃にイギリスの短期留学してたんだが、そのとき向こうの学校で仲良くなったんだ。アーノルドは凄いんだぞ。何せ貴族だからな。オルコット家といったら向こうじゃ名門貴族で、あいつはその中でも傑物と呼ばれていた男だ」

……あるえ。俺の耳がおかしくなったのかな? 何かイギリスへの短期留学とか他にも色々ツッコみたいところがあつたのに、今の話に出てきた家名で全部吹っ飛んだわ。

「と、父さん。アーノルドさんのフルネームって……」

「アーノルド・オルコットだけど、それがどうかしたか?」

聞き間違いじゃなかった！ イギリス・貴族・オルコットってもう間違いないじゃん！ どう考えても“彼女”のお父さんじゃん！ 何でそんな人と友達になつてんだウチの父親はあ!?

「アーノルド・オルコット氏といえば、『オルコット・カンパニー』を大学卒業後に立ち上げ、三年で大企業に育て上げたイギリスでは知らぬ人間のいないといわれるほどの有名な人だな」

「あら、詳しいのね千冬」

「ちようど現代史の授業で出てきたからな。なるほど、アーノルド氏と友人だったからこそ父さんもパーティーに呼ばれたわけか」

「別にそういうわけじゃないわよ。お父さんもアーノルドさんも会場で顔を合わせるまではお互いの事なんて考えてもいなかったみたいだし。どちらかというところ、通訳として呼ばれたという方が正しいかしら。この人、英語も入れて七ヶ国語を話せるから」

「なにそれ怖い」

「なんなの!?! なんなんなの!?! この短時間で父親のトンデモぶりが次々に明らかになつていくんですけど! 七ヶ国!?! 七ヶ国だと!?! どこだよ!?! そんなに覚えてどうしたいだよ!?!」

「ちなみに、私も五ヶ国語を話せるわよ。今回のパーティーには社長婦人と娘さん達も

参加されるって聞いてたから私が話し相手になるようにって」

「なにそれ凄い」

母さんよ、あなたもか……。

「そ、そんな技能があるなんて知らなかった」

「べらべらと自慢するものでもないしな。必要な時にさらつと披露するのがスマートな大人ってヤツさ」

か、カツコいい。なんだろう、着替えたシャツからはみ出てるビール腹すらもカツコよく見えてきた。

「母さんがいてくれて助かったよ。おかげでアーノルドのときの奥さんだけじゃなく、デュノア社長のところの奥さんと娘さんも楽しんでくれてたみたいだし——」

「そおおおおおおい!!!」

「きやつ!!? ちよ、ちよつとどうしたの一夏!!?」

「時間を考えろ。近所迷惑だろう」

大声を出す俺を咎める母さんと姉さん。しかし、俺はそれどころではなかった。

「いやいやいやいや! だってデュノアって! 今デュノアって言ったよねこの人!?!」

「おいおい、実の父親に向かつてこの人はないだろう。それより一夏。お前、デュノアさんの名前に反応するって事は、フランスのデュノア社の事知ってるのか?」

「あ、う、うん、ちよつとだけ」

あんまり下手な事言わないほうがいいわな。そもそも今はまだ“あれ”も存在していないんだし。

「実は今回の業務提携、俺のどこの会社とオルコット・カンパニー、そしてデュノア社の三社合同なんだ。何でウチみたいな会社とイギリス・フランスの大企業が業務提携出来たのか不思議でしょうがないんだけどな。ははは」

「それで、アーノルドさんを交えてお話したら、デュノア社長ともすっかり仲良くなっちゃったのよこの人。視察の時はぜひ家族を連れて来てくださいなんて言われちゃつて」

「そうそう。喜べ千冬、一夏！ 夏休みはイギリスとフランスに海外旅行だからな！ 今から楽しみにしておけよお！」

「わ、わかった……」

「ワイイ、タノシミ、ダナー」

上機嫌の父さんは気づいてないけど、姉さんも若干引いてるよ。だよね、別に俺だけがおかしいわけじゃないよね。

「あ、そうだわ。うふふ、一夏。実はちよつと面白い事があったのよ」

もう止めて！ 俺のライフはゼロよ！

「ウチにも子どもが三人いるって話したら、みんなぜひ会いたいって。今日は連れて来てないけど写真でよかつたらって携帯のヤツを見せたんだけど……そしたらセシリアちゃんとシャルロットちゃんったらあなたの写真をみて顔を真つ赤にしちゃったのよ。とつても可愛かつたわ。あ、セシリアちゃんはアーノルドさんの娘さんで、シャルロットちゃんはデユノア社長の娘さんの名前ね」

なに見せた!? 何を見せたんだ母さんよ!? 顔を真つ赤につて……アレか!? 風呂上りに千冬姉さんにタオルを引つ剥がされた時のヤツか!? それとも、去年海でマドカに水着をずり下ろされた時のヤツか!? いたいけな少女達になに見せてんだマジで!

「お、おとおお……」

頭を抱えて蹲る俺。そんな俺を見て母さんは何が面白いのかニヤニヤしている。

（わが息子ながらモテモテね。うふふ、夏休みの視察でこの子にあつた二人の反応が楽しみだわ）

「むう……（嫌な予感がする。かつて、ここまで“お姉ちゃんセンサー”が反応する事はなかった。これはマドカを抱き込んでおく必要があるそうだな）」

「ほれ一夏。よくわからんが、蹲つてないでこの写真でも見て元気出せ。これがアーノルドと奥さん、そしてセシリアちゃんだぞ」

「アッハイ」

「私にも見せてくれ」

(もういい。これ以上はもう何も驚かんしツッコまんぞ!)

——その密かな決意は写真を見た瞬間に彼方へと吹き飛んだ。

「確かに、可愛らしい娘さんだな」

「……なあにこれえ」

そこに写っていたのは、豪華な衣装に身を包んだハリウッド女優顔負けのスタイル抜群の超絶美女と、お姫様の様なドレスを着た美少女。

そして……そんな二人を両肩に乗せ満面の笑みを浮かべている筋肉モリモリマツチヨメンだった。身長はそうだな、隣に立っている父さんが百八十超えだから……うん、この感じだと2mは余裕でいってるな。すごいな。今にもスーツが弾け飛びそうだな。

「つてどこのコマンドーだよ!!!」

悪の組織どころか地球外生物すら片手で捻り潰すだろこの人! オルコット・カンパニーって軍事会社か!? それともプロテインか!? プロテインでも売ってるのか!?

「見た目はちよつと厳ついかもしれんが、お菓子作りが趣味の可愛いヤツだぞ。それにいざという時は家族を守る勇氣も持つてる」

「そうね。二年前に列車事故に巻き込まれたけど、潰れそうになった客車を押しとどめ

て奥さんを含めた乗客を見事に救ったって当時は日本でも大ニュースになったものね」
そうして、俺は「彼女」の不幸フラグの一つが二年前に折られていた事を知ることだっ
た。

「あ、そうだわあなた。ちよつとパソコンを借りてもいいかしら」

「どうした。何か調べものか？」

「ええ。デュノア婦人が宝塚に興味があるみたいで、ちよつと資料の請求法とかを調べ
たいのよ」

同時に、別のフラグも建ったのだが、この時の俺は気づきもしなかった。それを知る
のはもう少し先……夏休みであった。